

プロジェクト型デザイン教育の実践

—大川家具工業会との産学連携活動の推移とその成果 2012から2015年まで—

The Practice of Project Education for Design

—The transitions and results of the joint research activities with Corporative Association

Okawa Furniture Industry from 2012 to 2015—

デザイン学科・美術学科・写真映像学科

青木 幹太・井上 友子・佐藤 佳代・星野 浩司・佐藤 慈・荒巻 大樹

Kanta Aoki / Tomoko Inoue / Kayo Sato / Koshi Hoshino / Shigeru Sato / Daiki Aramaki

1. はじめに

大川家具とは、福岡県の南部に位置する大川市周辺で生産される家具のことを指し、天文5年(1536年)に榎津久米之介が船大工の技術を生かして指物を始めたのが起源とされ、480年の歴史とともに家具の生産高は日本一を誇るようになる。家具生産が発展した背景には、大川市の地理的特性も指摘されており、筑後川の河口に広がったこの地域は、上流に玖珠町や九重町など豊富な木材資源を有する地域があり、河川を使って家具の材料となる木材が供給された(図1)。



図1 家具産地大川の位置

本研究の連携先である協同組合大川家具工業会(以下、工業会)は、大川家具の製造や販売に携わる企業で組織する団体であり、1963年(昭和38年)に設立され、2014年4月の段階で組合員数126社を数える。1971年(昭和46年)に建設された「大川産業会館」は、工業会の新作発表や販売の拠点になっている。

近年、大川家具は国内の他産地と同様に、売上、生産高等が減少傾向にあり、工業会を中心に業界や大川市の活性化に向けて様々な取り組みが行われてきた(図2)。本研究で報告する産学連携活

動は、2012年度に工業会設立50周年の記念事業として、これまで工業会が力を入れてこなかった20代、30代の若年消費者を主要なターゲットとする家具の企画、開発を目的に始まった。本活動は記念事業という性格から、当初、単年度で終了すると考えていたが、予想以上の成果があったことから2012年以降、毎年、活動内容のレベルアップを図りながら2015年度の現在も、継続、実施されている。

本研究では、本学が推進するプロジェクト型デザイン教育のひとつのモデルとして、2012年度から2015年度(途中まで)の3年半に実施した工業会との産学連携活動の推移と成果について報告する。

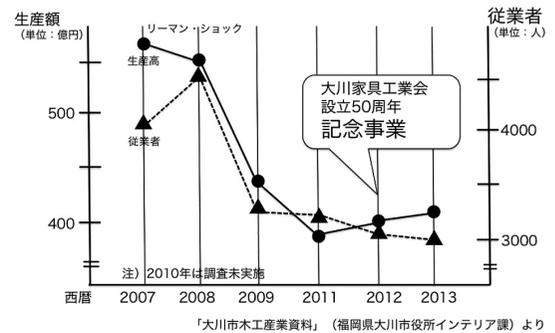


図2 大川家具の生産高・従業員数の推移

2. 2012年度の活動

2-1. 概要

工業会との産学連携活動は、工業会会員である有限会社貞刈産業の貞刈幸広氏より工業会設立50周年記念事業として、学生の新鮮な感性やデザ

インカで従来の大川の家具デザインを見直したいという相談があり、2012年5月から「わたしの部屋づくり」をテーマにした活動が始まった(図3)。大学側も工業会の意向を受けて、2012年4月の前期授業の開始時に主にゼミの3年生、4年生に連携活動の主旨や目的を説明し、それを受けて14名が参加することになった。2012年5月19日(土)に参加企業、学生が一堂に会し、キックオフ会議を実施した(図4)。工業会側のリーダーである有限会社生松工芸の石山隆通氏よりプロジェクトの背景・目的・目標について発表があり、大学側からは最近の地域企業の新しい取り組み事例や連携活動の体制や商品開発の考え方について企画案を発表した(図5・6)。2012年度は工業会、大学の双方がはじめての試みであったことから、プロジェクトの開始時点では連携活動の進め方、取り扱う課題など双方の思惑にずれがあり、話し

年度	2012	2013	2014
背景	工業会設立50周年の記念事業として	2012年度の成果を産学で総合的に評価した結果として継続	活動範囲が商品開発に加えて大川のPRに展開して実施
テーマ	わたしの部屋づくり	木もちい生活	From OKAWA Mind
概要	参加学生が男子、女子チームに分かれ、チーム毎にわたしの部屋づくりに必要な家具を提案	参加企業からそれぞれの得意分野に繋がるテーマを提示し、13チームに分かれ家具、木製雑貨を提案。	参加企業からテーマが提示。13チームに分かれ家具や大川IPRのための雑貨を提案
実施期間	2012年5月～2013年3月	2013年5月～2014年3月	2014年5月～2015年4月
参加企業	14社	13社 2012年度より継続	13社 継続9社、新規4社
参加学生	14名	18名	29名 デザイン学科19名 住居インテリア学科10名
製作数(種別)	17	16 家具13 雑貨3	15 家具11 雑貨4
成果・課題	工業会が提案を分擔制作しながら商品化までできなかったプロジェクトの効果的な進め方を検討できた	企業の得意分野の家具、雑貨を企画したこと、4点が商品化された企業—大学のチームワークが向上した	学生提案の企画を生かした商品づくりのレベルが向上した

図3 2012年から2014年の連携活動



図4 キックオフ会議

大川プロジェクト 連携と役割

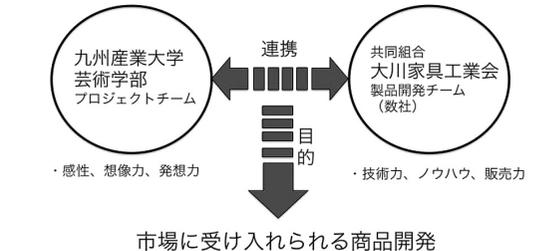


図5 プロジェクトの体制

大川プロジェクト 開発方針案

ライフステージに応じた商品開発と市場展開



図6 商品開発の考え方

合いが噛み合わないことも多々あった。

双方、試行錯誤する中で、参加した学生を男子1グループ、女子3グループに分け、家具に対する若年男女の志向の違いを明らかにすることに重点を置いた。その理由は、2012年4月に大川で開催された大川家具の展示会を見学した際に、女子学生の感想として「欲しいものがない」という意見が多く出されたことが拠り所となった。

2-2. 活動内容と成果

男女に分かれたチーム毎に、「わたしの部屋づくり」を基本テーマとして、家具および家具で構成されるインテリアデザインの企画に着手した。企画の前提として「大川家具の発展に貢献した河内諒氏の『引き手なしタンス』(1955年)のように、伝統的なイメージを払拭する新しい価値を盛り込む」ことを条件に定めた。参加企業と学生

による会議を、2012年6月28日(木)、8月28日(火)に開催し、企画内容の発表や絞り込みを行い、11月5日(月)には大川産業会館で最終報告会を実施した(図7)。このときに学生4グループが31



図7 2012年度最終報告会



2012年度
九州産業大学芸術学部×大川家具工業会加盟企業14社
女子グループAの提案

図8 女子グループが提案した家具(1)



2012年度
九州産業大学芸術学部×大川家具工業会加盟企業14社
女子グループBの提案

図9 女子グループが提案した家具(2)

アイテムの家具デザインを提案し、参加企業14社による審査会議を経た後、ワードローブ、ベッド、ソファ、本棚、シューズラックなど17アイテムの家具デザインが選ばれ、14社がそれぞれ分担して試作が行われた(図8~11)。2012年12月から2013年1月にかけて学生が提案した家具は企業側で試作され、2013年2月26日(火)から3月4日(月)まで天神イムズ地下2階のイムズプラザで開催した「地域産業プロモーション展」、3月20日(水)から3月24日(日)までアクロス福岡1階アトリウムで開催した「プロジェクト展」で展示・公開し、来場者より意見、要望等の聴き取りを実施した(図12)。展示した家具の中で女子グループが企画、デザインした家具は、女性目線からスタイリングや機能を見直し、「女子家具」という

2012年度
九州産業大学芸術学部×大川家具工業会
加盟企業14社
女子グループCの提案



図10 女子グループが提案した家具(3)



2012年度
九州産業大学芸術学部×大川家具工業会加盟企業14社
男子グループの提案

図11 男子グループが提案した家具



図12 地域産業プロモーション展での展示

ネーミングにしたことで、多くの女性来場者から高い評価を得ることができた。その結果、工業会側も従来の家具市場に「女子家具」というニッチな市場があることに注目した(図13)。2012年度の連携活動は、成果物の公開・展示を通して来場者や関係者から予想以上の反響を得たことで、工業会は2013年度の継続を決定した。

企業側は「女子家具」市場に注目

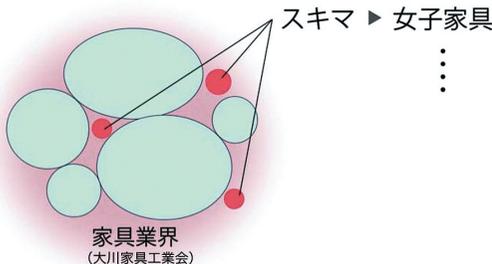


図13 女子家具の市場

3. 2013年度の活動

3-1. 概要

2012年度の活動終了後、参加企業と連携活動の成果や課題について意見交換を行った。その際、2012年度は学生チームが提案した家具について参加した13社が分担して試作する方法であったことから、①企業の得意分野や既存の商品ラインに生かせない、②企業が抱える課題解決にならないなどの反省から、2013年度は参加企業からそれぞれに開発テーマを提示してもらい、参加学生

が数人のチームに分かれて企業スタッフとチームを組み、開発を担当する方法に変えた。その狙いは、連携活動の内容やチームワークを高め、現実的だが質の高い提案に結びつけることにあり、2012年度の活動で注目された「女性目線」の家具開発を継続し、女性ニーズを掘り下げた提案から6アイテムの家具・雑貨が商品化されることになった。

3-2. 活動内容と成果

2013年度は、2012年度の活動の経験や振り返りをもとに、産学連携による家具・雑貨開発プロセスの見える化により参加企業、学生の共通認識を図った(図14)。

期間	プロセス		活動内容
	2012	2013	
4月～5月	キックオフ会議		年度はじめに行う会議。企業と学生が開発テーマや目標、日程等を協議し、企業と学生で開発チームを編成する。
6月～7月	企画会議		学生が企業に市場調査等から分かった課題やコンセプト、アイデアを報告し、開発方針を決定する。
8月～10月	デザイン会議		開発方針に沿って、学生がスケッチやモールドでアイデアを具体化し、企業側と協議を繰り返す。双方が納得するまで、デザイン会議やメールのやり取りを行う。
12月	プレゼンテーション		大川産業会館の大会議室を使い開発プロセスに沿って、デザイン案を発表する。
12月～1月	試作		企業と学生が共同でまとめたデザイン案に沿って、企業が製作を行う。
1月	展示会(工業会主催) 新春展 大川産業会館	撮影・パンフ等の制作	大川家具工業会が主催するバイヤー向けの展示会で、試作した家具を展示し、バイヤーから意見を聞く。
1月～2月	撮影・パンフ等の制作	展示会(大学主催) 九大プロフェュニア展 天神イムズ	大学が主催する一般向けの展示会で、試作家具の市場性等を評価し、商品化を判断する。
2月～3月	展示会(大学主催) 地域産業プロモーション展 天神イムズ		大学が主催する一般向けの展示会で、試作家具の市場性等を評価し、商品化を判断する。
4月		展示会(工業会主催) JAPAN INTERIOR展 大川産業会館	大川家具工業会が主催するバイヤー向けの展示会で、試作した家具を展示し、バイヤーから意見を聞く。

図14 産学連携活動のプロセス

(1) キックオフ会議

年度のはじめに参加企業、参加学生が一堂に会し、開発テーマや目標、目的等を協議、確認するための会議である。2013年度のキックオフ会議は、2013年5月27日(月)に本学で実施し、工業会企業の弱点である企画、開発、販売力を補うことを目標に置き、「木もちいい生活」を共通のテーマに設定した。キックオフ会議では全体会議の後、参加企業と担当する学生のチームに分かれ、開発方針や日程の確認、企業側の考え方や要望等の聞き取りを行った。

(2) 企画会議

企業側から提示される開発テーマは、「リビン

グに置くアクセント家具」のように漠然としたものが多いことから、大学側では企画会議までに家具市場の動向や若年世代の生活スタイルや価値意識などに関するデータ収集、展示会や家具量販店、ショールーム等の見学、取材を行い、約2ヶ月かけて開発テーマの絞り込み、テーマに対するコンセプト設定、アイデア展開を行った。企画会議は2013年度では6月から7月の間に実施し、その期間に行った調査結果を資料にまとめ、開発テーマに沿ったコンセプト案、コンセプト案を可視化したアイデアスケッチなどを企業側に提示し、数回の協議を経て、開発方針を決定した(図15)。大学、企業双方の共通認識として、産学連携活動の最終目標を「開発した家具の商品化」に定め、常に生活者の視点から企画を練り、生活者に訴求する新しい価値を発見し、盛り込むことを重視した。企画会議から導き出された結果は、参加企業、学生全員が参加し大川産業会館で開催する「中間報告会」で発表し、メンバー全員で情報の共有化を図った。尚、中間報告会終了後に懇親会を開き、企業スタッフと学生の交流によるチームワークを深化させた。



図15 企画会議の事例

(3) デザイン会議

企画会議で決定した開発方針に沿って、学生はアイデア展開や見直しを繰り返し、スケッチを元にスケールモデルやCGモデルを制作するなど、立体でアイデアを検証する作業を進めた。立体モデルにより、家具や雑貨の使い方、外観の形状・

寸法、素材、仕上げ方法などの仕様を固め、試作に必要な図面とともに企業側に提出した(図16)。学生チームの中には、企業から了解を得るまで何度も仕様を見直すなど、商品化の難しさや企業現場の厳しさに直面することも少なくなかった。



図16 デザイン会議の事例

(4) プレゼンテーション

2013年度は12月11日(水)に、2014年度は12月1日(月)に、どちらも大川産業会館で最終報告会を実施し、最終的に決定した家具・雑貨のデザインについてチーム毎にプレゼンテーションを実施した(図17)。プレゼンテーションでは学生がデザインプロセスに沿って、最終デザインまでの過程を報告し、企業スタッフが補足説明を行った。プレゼンテーション後に提示したデザイン仕様に従って企業側が試作に取りかかった。



図17 プレゼンテーション (大川産業会館にて)

(5) 展示会「新春展」

2012年度、2013年度は、大川産業会館を中心に主にバイヤー向けに開催される「新春展」(1月)の特別展示として、試作した家具・雑貨を同会場に展示、公開した(図18~22)。この展示会では全国から家具のバイヤーが来場することから、売る立場から展示した家具・雑貨に対して意見や要望を聞くことができた。新春展終了後、試作品を大学に搬入し、学内の写真スタジオで写真映像学科の学生の協力を得て、試作された家具・雑貨を撮影し、大学が主催する展示会のポスターやDM、パンフレット制作の素材として活用した。

2013年度
九州産業大学芸術学部×大川家具工業会加盟企業13社
【子供用の家具・玩具】



図18 2013年度開発家具(1)



図19 2013年度開発家具(2)



図20 2013年度開発家具(3)



図21 2013年度開発家具(4)



図22 2013年度開発雑貨

(6) 展示会「地域産業プロモーション」

2013年度の地域産業プロモーションは、2014年2月20日(木)から3月1日(土)の会期で、天神イムズ地下2階のイムズプラザで開催した。展示会のテーマは「芸術の力」で大川家具のほか、博多織や博多人形、久留米餅など伝統産業に係る企業、工房と連携した商品開発等の成果を展示、公開した。大川家具については、来場者を対象にアンケート調査を実施し、生活者の意見、要望をその後の商品化に活かしている。

4. 2014年度の活動

4-1. 概要

2014年度は工業会との産学連携の3年目に当たる。参加企業数は2012年度と同じ13社であったが、参加学生数は2014年度より工学部住居インテリア学科が参加したこともあって、18名から29名に増加した。2014年度の活動テーマは「From OKAWA Mind」で、大川のモノづくりの

魅力を伝えることを目標とした。キックオフ会議から試作までの過程は2013年度と同様だが、試作以降の過程は、大川のPR効果を高めるという目的から産学連携活動の範囲を広げることになった。

4-2. 活動内容と成果

2013年度まで試作した家具・雑貨は、1月に大川産業会館で開催される新春展で公開、展示したが、試作品の完成度を上げる期間が短いなどの理由で、試作品を一旦、1月末に大学に搬入し、学内の写真スタジオで撮影し、2015年2月19日(木)から3月4日(水)の会期で、天神イムズ地下2階のイムズプラザで開催した「九産大プロデュース展」(旧称、地域産業プロモーション展)で展示、公開した(図23~26)。2014年度も2013年度同様、展示、公開した家具・雑貨について来場者からアンケート調査を実施し、450人から回答

を得た。

2014年度は、最終デザインの決定、確認を目的に、スチレンボードや発泡材等の素材を使ってフルスケールモデルを制作した。これらは大川側の試作にはない柔らかい素材感や全ての家具が白色で統一され、独特の風合いが演出されることから、2015年1月14日(水)から19日(月)まで中央区大名の「紺屋ギャラリー」で「1/1展(イチブンノイチ展)」を開催し、大川家具や工業会と大学の産学連携活動のPRを行っている(図27)。

2014年度は上記の2つの展示会の実施と並行して、2015年4月8日(水)から9日(木)に大川で開催される「JAPAN INTERIOR総合展2015」、その継続として4月11日(土)から12日(日)に同じ会場で開催される「第6回春の大川木工祭り」の出展の準備を進めた。2014年度の連携活動は、

2014年度
九州産業大学芸術学部×大川家具工業会加盟企業13社
【箱物家具】



図23 2014年度開発家具(1)



図24 2014年度開発家具(2)



図25 2014年度開発家具(3)



図26 2014年度開発家具・雑貨



図27 1/1展会場



図29 第6回春の木工祭りのポスター



図28 JAPAN INTERIOR総合展2015



図30 ワークショップ

工業会のPR委員会が担当しているため、本活動の内容や成果を大川のPRに活用するという狙いから実現したものである。JAPAN INTERIOR総合展2015では、企業展示と同じフロアに産学連携活動で試作した家具・雑貨を展示・公開するとともに、写真映像学科が制作した大川PR映像や産学連携活動の過程を追った映像記録を上映し、来場者から高い評価を得た(図28)。また第6回春の大川木工祭りでは、学生デザインの椅子2アイテムが、来場者を対象とした家具づくりワークショップのテーマに選ばれ、当日は学生らもワークショップのお手伝いに奔走した(図29・30)。

5. 2015年の活動

2015年度の活動は、2015年5月からはじまり、2015年11月現在、デザインの最終仕様のまとめ

に向けた活動を実施している(図31)。2015年度の参加企業数は16社で、このほか大川市役所が大川市のお土産づくりを目的に参加している。参加学生数は、家具・雑貨開発を目的としたデザイン学科、住居インテリア学科の学生が37名、大川のCM制作や家具を使ったプロジェクションマッピングなど写真、映像制作の学生が36名であり、毎年、参加学生は増えている。2015年度も2014年度同様、活動の成果は、2016年2月18日(木)から3月6日(日)の会期で天神イムズ地下2階のイムズプラザで開催した「九産大プロデュース展」と、2016年4月6日(水)から7日(木)まで開催される「JAPAN INTERIOR 総合展2016」、4月9日(土)から10日(日)まで開催される「第7回春の木工まつり」展示を予定している。

年 度	2015
背 景	工業会のPR委員会が幹事となり商品開発のほか、大川のPRにも力を入れる
テーマ	大川PR
概 要	芸術学部デザイン学科、写真映像学科、工学部住居インテリア学科の3学科と大川の企業16社および大川市役所インテリア課の連携で商品開発、CM映像制作、写真制作を行う。
実施期間	2015年5月～2016年4月
参加企業	16社+大川市役所
参加学生	29名 デザイン学科22名、写真映像学科 住居インテリア学科15名
製作数 (種別)	15 (予定) 家具11、雑貨4、映像作品、写真作品
成果・課題	昨年度より成果の発表の場が、本学が主催する九産大プロデュース展」のほか、大川で開催されるジャパンインテリア総合展、春の木工祭りまで展開された。2015年度についても開発商品のほか、写真・映像作品の展示を計画している。

図31 2015年度の連携活動

6. まとめ

2012年に、工業会設立50周年の記念事業として始まった産学連携活動は、毎年、連携の仕方や進め方、開発テーマなどを見直しながら2015年で4年目を迎えた。4年間の活動を振り返ると、参加企業の規模や得意分野、連携活動に期待するものに違いはあるが、企業と大学の双方の共通認識として「売れる商品づくり」を目標に掲げ、参加学生にも企業の経営に資する成果を求めてきた。活動の成果には、工業会がそれまであまり力を入れてこなかった「女子家具」という市場の存在を確認したこと、一部の家具・雑貨は商品化され流通していることなどがある。当初、予想していなかった成果として、参加した学生が家具デザインに関心を持ち、卒業後に大川の家具メーカーに就職し、家具デザイナーとして社会に踏み出していることがある。大川も多くの地方都市と同様に、人口の高齢化や若年人口の減少が進みつつあり、デザインを学びモノづくりを志向する若い働き手の流入は、大川の活性化に繋がると期待されている。

大学側から見ても、大川はデザインを学んだ学生の受け皿として、今後も人材の確実な需要が見

込まれ、大学が推進する地域貢献にも合致すると考えられる。本活動では、連携した企業に積極的に教育に係わってもらうとともに、学生のチーム構成を異学年で構成し、次年度に進め方や目標を引き継ぐように配慮している。地域企業と大学の連携は、モノづくり活動を通して「地域が期待する人を育てる→その人が地域に受け入れられそこで活動、活躍する→地域で活動する人を媒介に再び大学と係わり（産学連携や教育支援など）、次代の人を育てる」という循環型の人づくりに発展する可能性が高く、大学の研究、教育の場を地域貢献に活かす方法として今後も検証していきたい（図32）。

プロジェクト型デザイン教育

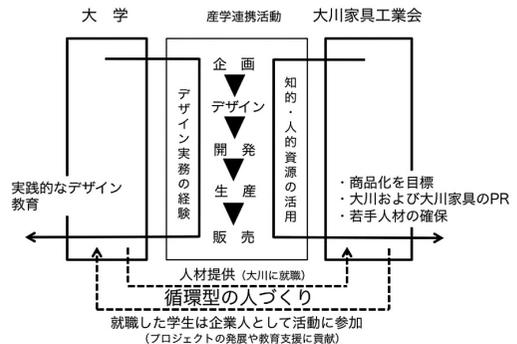


図32 大川家具工業会との産学連携によるプロジェクト型デザイン教育

参考文献

- 1) 青木幹太、井上友子、佐藤佳代、星野浩司、佐藤慈、荒巻大樹：プロジェクト型デザイン教育の実践 —大川家具工業会との産学連携活動の推移とその成果—、日本デザイン学会第62回春季研究発表大会概要集、2015.7
- 2) 隈本あゆみ、石山隆通、下田隆、青木幹太：女性目線によるカフェスタイルの家具提案(2)、日本デザイン学会第62回春季研究発表大会概要集、2015.7
- 3) 中西拓也、青木幹太、酒見史裕、黒木麻衣：オフィス利用を想定した木製家具の開発 —大川家具工業会との連携活動の成果として—、日本デザイン学会第62回春季研究発表大会概要集、2015.7
- 4) 青木幹太：プロジェクト型デザイン教育によるフィールドワークの実践、日本デザイン学会研究特集号84、第21巻4号、通巻84号、p34-39

- 5) 青木幹太、井上友子、佐藤佳代、星野浩司、佐藤慈、
荒巻大樹：プロジェクト型デザイン教育の実践 ―宗
像エリアのデザイン支援活動―、九州産業大学芸術学
会研究報告、p77-86、2015.3